

劇と劇場と劇の登場人物についての二幕

第一幕……舞台編

登場人物

ヒーローに見えない男（ヒーロー）

缶コーヒーを持つ男（缶コーヒー）

劇場。公演準備中の舞台。

調光卓や脚立、照明用のシートなどが雑然と置かれている。

男がひとりだけ舞台の上において、（缶コーヒーを持つ男。今はまだ持っていない。）

照明機材を吊りこんだり、調光卓を操作して点灯チェックをしたり、コードや平
台を運び込んだり、黙々と作業している。劇場内に、彼以外は誰もいない。

やがて携帯電話が鳴る。

缶コーヒー（電話に出る）はい。あ。お疲れ様で、す。

え、あと一時間くらい？……はい……了解です。

えっと、種類とか……はあ。適当に？

わかりました。はい。どうもー。

缶コーヒーを持つ男、電話をポケットにしまう。

上着を着て明かりを消し、劇場のドアから出て行く。

誰もいない（はずの）劇場。

スピーカーから雨の音。いつの間にか、舞台の上に薄く明かりが射している。

別の男が舞台の上に現れる。（ヒーローに見えない男）

ヒーロー 真っ暗で何も見えないと思っていたけれど、

記憶の中のその光景にはうっすらと白い灯りが差している。

雲の切れ間から、月の光が落ちてくる。

誰かの声が聞こえた。

誰もそれにこたえなかった。

答えなくても、声が聞こえた。

誰かの話すことばを、別の誰かが聞いていた。

言葉は光らないから、何も見えなかった。

だけど聞こえた。

闇の中に埋もれてしまえば、声が聞こえた。

誰かが話し続けていれば、闇は動いていた。

話すのなら、今ここにないものか話を話したかった。
今ここにないものか話ばかりしようと思った。

ヒーロー おーい。

耳を澄ましてみる。が、誰も何もこたえない。
誰もどこにもいない。

ヒーロー おーーーーーい。

落雷。と同時に真っ暗になる。

しばらく。

天井に吊られた照明機材に灯がともり、舞台上の上だけが急に明るくなる。
さっきの緊張感はどこにもなく、雑然とした舞台の上に、男が一人。
ヒーローに見えない男が座り込んで、舞台上の調光卓をいじっている。
(彼が電源スイッチを入れたので接続されていた照明が点いたのだ。)

ヒーロー (明るくなったことに一瞬驚くが…) :書き直すってどうなんだよ。

書いたのに削除するってどうなんだよ。実は登場しなくてもよかった登場人物ってなんなんだよ？登場しないほうがよかった登場人物って、なんなんだよ？(ぶつぶつ言っている)

ヒーロー 「上演されなかった劇の登場人物は、霊になって劇場に漂う」って

ほんとなんだらうか？それは、上演されるまで成仏しないってことなんだらうか。

さっき出て行ったはずの缶コーヒーを持つ男が缶コーヒーをたくさん抱えて客席の通路にいる。ヒーローに見えない男を見て呆然としている。

実はもっと前に戻ってきていて、さっきのセリフを聞いていたのだ。

客席は暗いのでヒーローに見えない男はまだそれに気づかない。

缶コーヒー (思わず口をついて出てくる) 「話すことはいくらでもあった。話すために話し続けた。
いるかもしれない誰かがいるかもしれないと思うために。いるかもしれない自分もいるかもしれないと思うために。」

ヒーローに見えない男、驚いて缶コーヒーを持つ男を見る。

しばらく、じっと見ている。缶コーヒーを持つ男は決まりが悪くて固まったまま動
けずにいる…

ヒーロー 「…あったらいいのと思うものをあったのかもしれないと思うために
(おそろおそろ、セリフを返してみる)」

二人 「満月だったんですね。今夜。だからこんなに明るいですね……」

間

缶コーヒー なんて知ってるんです？

ヒーロー なんてって、俺の……。いや、君は……なんで？

缶コーヒー なんてって……自分の……台詞だったから。

缶コーヒーを持つ男、抱えていた缶を置いて舞台上にあがる。

ヒーロー え……、

缶コーヒー (ヒーローに見えない男に近づいて話しかける) ……これじゃ、意味分かんないですよ。ね。

ヒーロー ……

缶コーヒー 誰に……なんのために云ってるんだか。そもそもお前誰なんだって話ですよ。ね。

ヒーロー ……

缶コーヒー いろいろね、想像はしますけど。

ヒーロー ……

缶コーヒー 僕の台詞です。(得意げに)

ヒーロー 僕の台詞？(詰問する)

缶コーヒー いや、(たじろぐ) 台詞……だったんです。

間

ヒーロー あの……。それは、どういう……。 (詰め寄る)

缶コーヒー ……ていうか、あなたは？ここでなにを？

ヒーロー ……たしかに。これだけじゃなにもわからない。

缶コーヒー その台詞、僕が言うはずだったんです。僕の役がなくなったら。

ヒーロー なくなったの？君も？

缶コーヒー 君も？

ヒーロー (頷く)(頷く)

缶コーヒー えっと。それは……でも、あの台詞は……あれ？……正確に覚えてましたよね。

ヒーロー 覚えてたわけじゃない。覚えらんないよ。あんな、長い……

缶コーヒー 長くないっすよ。全然。

ヒーロー そう？

缶コーヒー 正確でした。一字、一句。(得意げに)

ヒーロー そう？

缶コーヒー あの……。話が見えないです

ヒーロー 見えないね。たしかに、これだけじゃね。

缶コーヒー どの俳優さんですか？

ヒーロー 俺は俳優さんじゃない。

缶コーヒー いや、だってあなたの台詞って……

ヒーロー あれ、君の台詞なんですよ？

缶コーヒー 僕の……ていうか……僕だった……ていうか。えっと……あれ？……あなた、

ヒーロー 君は俳優なの？

缶コーヒー……………はい。

間

ヒーロー……………つまり。

缶コーヒー？

ヒーロー 君か。

缶コーヒー あの。

ヒーロー あれは、君の、台詞。

缶コーヒー はい。

ヒーロー 削除された、劇の、台詞。

缶コーヒー はい。

ヒーロー つまり、俺の、台詞。

缶コーヒー えーと、それは…？

缶コーヒーを持つ男、混乱している。

ヒーローに見えない男、納得している。

缶コーヒー！「空っぽの舞台には誰がいる」って聞いたことがある。

「上演されなかった劇の登場人物が霊になって劇場を漂う」って聞いたことがある……………けど
……………その……………つまり……………そういうあれですか？

ヒーロー 霊…。

缶コーヒー …あれ都市伝説じゃなかったんだ…

ヒーロー やっぱりそうなんだ…。霊…ね。(ひとりで納得している)

缶コーヒー 登場人物の？

二人 霊…

缶コーヒーを持つ男は、思わぬ事態に興奮している。

ヒーローに見えない男は納得している。

缶コーヒー いや、でも…。上演されなかった以前に、完成もされていない台本なのに…

ヒーロー そうなんだ…

缶コーヒー で、ええっと…霊が、そこで、何を？

ヒーロー …何を？

缶コーヒー いつからいるんですか？

ヒーロー いつから？

缶コーヒー 何してるんですか？

ヒーロー …何を？

缶コーヒー いつまでいるんですか？

ヒーロー …いつ…

缶コーヒー 今までどこにいたんですか？

ヒーロー …

缶コーヒー 舞台の上には魔物が住んでるとかいうあのひとは、また違うんですか？

ヒーロー そんな、いちどにいろいろ聞かれてもさあ、

缶コーヒー いや、聞くでしょ。

ヒーロー 聞かれることに何もこたえられないってすごい不安なんだよ。

缶コーヒー こたえられないんですか？
ヒーロー なんでもこたえられると思うの？
缶コーヒー だって、あなたのことだから。
ヒーロー ひとのことなんて、どうでもいいじゃないか。
缶コーヒー よくないですよ。僕の役だったんです。僕の役に…なるはずだったんです。
ヒーロー…
缶コーヒー 主役だって。聞いてたんです。なのに、
ヒーロー…
缶コーヒー 台詞も、登場するシーンも、全部削除して書き直されて。
ヒーロー…
缶コーヒー 完成した台本には、ひとことも台詞がなかったんです。
ヒーロー…
缶コーヒー 役自体がなくなったんですよ!!!
ヒーロー…
缶コーヒー どの誰なんだかもよくわからないうちにですよ。
ヒーロー…
缶コーヒー で、つまり、あなたが、あの…ってことでしょ。

間

ヒーロー それはつまり、君があ…ってことだよね。
俳優も決まっていたのに、俺、削除されたんだ…。
缶コーヒー あの…
ヒーロー どうして…。
缶コーヒー (困っている)
ヒーロー 何か知ってる？
缶コーヒー 何って？
ヒーロー 何って、何もかもだよ。俺の知らないこと全部。
俺の言うはずだった台詞はどうなった？
俺のするはずだった行動は？
俺の会はずだったひとは？
俺の観るはずだったものは？

缶コーヒー を持つ男、しばらく考えている。が。

缶コーヒー うーん…：答えてあげたいんですけど…、それは…、無理ですね。
ヒーロー…？？
缶コーヒー あの劇は別に、「あなたが登場しない」劇じゃないっていうか。
ヒーロー…？！
缶コーヒー いや、登場しないんですよ、もちろん。
ヒーロー…？
缶コーヒー でも、あなたが登場しない世界って、あなたが登場しようがない世界なわけだから…
つまり、あなたが言うはずだった台詞とか、あなたが会うはずだったひととか、あなたが見るはずだったものとか、そういうのは、ない…っていうか…。どうなったとかじゃなくて、ただ、普通に、ない…、っていうか。
ヒーロー じゃ、俺はどうすればいいんだ。
缶コーヒー どうもこうも。

ヒーロー！

缶ーヒー それが、あなたがない、ってことなんじゃないですかね。

ヒーローに見えない男、とても落胆している。

缶ーヒー 落ち込まないでください。

ヒーロー 落ち込んでるわけじゃない。前例がない状況で孤独に悩んでる。

缶ーヒー 誰の人生だって前例はないですよ。

ヒーロー …だって、最初は、俺、劇の中にいたんだよ。

缶ーヒー 知ってますよ。でも、今はいないんです。

ヒーロー 君はそれでいいのか？

缶ーヒー 良いも悪いも、いないものはどうしようもないじゃないですか。

ヒーロー 俺がいれば、きっと、もっと…

缶ーヒー 自分の台詞がない劇の中で何するんです？

ヒーロー …アドリブで対応する…とか。

缶ーヒー アドリブっていうのは俳優がすることであって、登場人物がすることじゃありません。

ヒーロー …考えたことある？自分が登場するはずだった世界から自分だけが削除されて、

そのまま何事もなかったかのように時間が流れて行く…。

缶ーヒー 考えたことはないですけど、でも…自分がいなくなった後の世界って、

そういうもんじゃないですか？

ヒーロー …

缶ーヒー この流れですごい言いにくいんですけど。

ヒーロー 何？

缶ーヒー そこ…。

ヒーロー …

缶ーヒー あけてもらえませんか？

ヒーロー …

缶ーヒー もうすぐトラックがきます。舞台のセットを運び込むんです。

いろいろあってちょっと遅れてますけど。あなたがずっとそこにいと、劇が上演できませ
ん。劇を劇にするには、いろいろと準備がいるんです。

ヒーロー そうか。ここに…。俺のいない世界を作るんだ…。

缶ーヒー そんな言い方なくても。

ヒーロー 俺にとってはこの劇は何よりもそういう劇なんだよ。

缶ーヒー あの。

ヒーロー 何？

缶ーヒー 僕が言うのもどうかと思いますが、でも、僕が言わないと誰も言うひとが
いないと思うので言いますけど。

ヒーロー …

缶ーヒー あなたが登場しないまま、この劇が上演されることはもはや避けられないわけですか
ら、
ここはもう、この劇のことは忘れて、あなたは新しくあなたの道を進んでいかれてはどうで
しょうか。

ヒーロー 新しい道？どんな？

缶ーヒー たとえば、このまま…その、なんとというか、演劇の精、みたいなものになってみると

か。
か。

ヒーロー 演劇の精っていうのは、なってみようと思ったならなれるもんなの？

台本になくても？

缶ーヒー もう登場人物じゃないんですから、台本のことは考えなくていいと思います。
ヒーロー 登場人物だった頃は、台本のことなんか考えなかったよ。

登場人物は台本のことなんか考えないんだよ。誰が演じるとか、どこで上演されるとか、台本に何て書いてあるとか、そもそもそれが劇なのかどうかさえ考えたことはない。

缶ーヒー …それはそうでしょうね。

ヒーロー でも、それも登場する世界があったらこそ、だ。

缶ーヒー …

ヒーロー 登場するところがなくなった今、俺は考えるよ。

自分の住んでるはずだった世界はどんな劇の中の世界だったんだろう？

その劇はどこでどんな風に上演されるはずだったんだろう？

自分の役は誰がどんな風に演じるはずだったんだろう？

缶ーヒー …

ヒーロー 考えたこともないくらいあたり前のものって、今はもうないって言われたとき

から何よりもあたりまえじゃないものになるんだよ。そんなにもあたりまえじゃないもの
ことを考えないわけにはいかないんだよ。

缶ーヒー …そういうものですか。

ヒーロー 俺はね。

缶ーヒー なんかすいません。

ヒーロー いいよ。こういうことって、立場が違うとわからないもんだと思うよ。それに。

缶ーヒー …

ヒーロー 俺、精じゃなくて霊なんじゃなかった？

缶ーヒー 霊と精って違うんですかね？

ヒーロー なんとなく、精のほうが、役に立ちそうな感じがするけど。

缶ーヒー そうかもしれませぬ。選べるなら精のほうが。

ヒーロー 選べるの？

缶ーヒー さあ…でも、精、がまずいんなら、精みたいなもの…で…

ヒーロー で、その、精、みたいなもの？になったら…何か変わる？

缶ーヒー とりあえず、自分の存在を肯定的に説明できるんじゃないかと。

ヒーロー 「登場人物じゃないです」

缶ーヒー 「精です」

ヒーロー ……誰に説明するの？

缶ーヒー …ここにいたら、また誰かに会うかもしれないじゃないですか。

僕はいいですよ。ある意味当事者ですから。あなたの事情も、納得できなくても理解は
できます。でも、このままじゃ、あなた、僕以外のほとんどのひとと無関係なわけで。

誰かに会ったとき、自分のことを、なんて説明するんです？

ヒーロー …

缶ーヒー 登場人物ってだけでも胡散臭いの、登場人物、できえ、ないなんて。

複雑すぎてなにがなんだかわからないじゃないですか。そんなわけのわからないことをいき
なり言われて信用できますか？

ヒーロー …でもさ、霊とか精とかかって信じるかな。そっちのほうがわけわからなくないか？

缶ーヒー そんなことないです。

あなたがここにいるのは、流れからいくとそういうことだとして考えられない。

僕はそう思いました。

ヒーロー …そうかな。

缶ーヒー ほら信じた。

ヒーロー …

缶ーヒー 話し方次第でしょう。

ヒーロー さすが俳優って、言葉に説得力あるよね。

缶ゴ―ヒー …別に俳優だからじゃないと思いますけど。

ヒーロー …そう？

缶ゴ―ヒー それに、特に説得力があるとも思いませんし。

ヒーロー …そうかな？

缶ゴ―ヒー あなたが説得されすぎるんです。

ヒーロー ……………

缶ゴ―ヒー …あ…

ヒーロー …どんな役だったの？俺？

缶ゴ―ヒー …えっ僕も詳しいことは…

ヒーロー …詳しくなくていいよ。知ってることだけでいいよ。

缶ゴ―ヒー …むしろ、僕が知りたいです。あなたがどんな登場人物だったのか。

ヒーロー ……

缶ゴ―ヒー …僕がやるはずだった役は、どんな役だったのか。

ヒーロー …俺にわかることなら話すよ。見てわかることならどこでも見てよ。

缶ゴ―ヒー …ありがとうございます。でも、見てますけど特に…

ヒーロー …だから教えてよ。

缶ゴ―ヒー ……

ヒーロー …ここは劇場で。これから劇が上演されて。俺は劇の登場人物で。

でもその劇には登場できない…ってそりゃ、わからないよ。俺だってわからない。じゃあ、

なんで俺は今ここにいるんだよ？霊とか精でもいいよ。でも、そういうことになったのはい

ったいどういうわけなんだよ？

誰かに説明する以前に、自分で納得したいじゃない。何がどうなってこうなったのかがわか

れば、その先にこれからのことも見えてくるような気がするじゃないか。

缶ゴ―ヒー …なるほど。わかりました。

ヒーロー …どんな役だった？俺…

缶ゴ―ヒー ……(躊躇している)

ヒーロー …知ってることだけでいいよ。些細なことでもいいから…

間

缶ゴ―ヒー …(できるだけさりげなく言い逃げようとする)……ヒーローの役でした。

ヒーロー ……何の役？

缶ゴ―ヒー …ヒーロー(目を合わせずに)

ヒーロー …ヒーロー？ってあの？

缶ゴ―ヒー …あの。(と言ってはみたものの…)どの？知らないんですか？ああ。そうか。

ヒーロー ……どんな？

缶ゴ―ヒー ……さあ。

ヒーロー ……なんのための？

缶ゴ―ヒー ……さあ。

ヒーロー ……誰のための？

缶ゴ―ヒー …詳しいことは…素性がわかるようなことはほとんどなにも書かれてなかったんです。

ヒーロー ……嘘つけ。じゃあ、なんでヒーローだってわかるんだよ。

缶ゴ―ヒー ……台本を読んだからです。

ヒーロー ……完成してないんだろ？読んでも何もわからないだろ？

缶ゴ―ヒー ……そうですけど、劇の台本には、本編の前に「登場人物」の一覧があるんです。

ヒーロー ……

缶ゴ―ヒー ……それから、登場人物が何かしたり話したりするときには、必ずその言葉や行動の上にそれがどの登場人物のものなのかがわかるように示されます。

ヒーロー ふうん。

缶ゴ－ヒー 書いてあったんですよ。

ヒーロー ヒーローって？

缶ゴ－ヒー ヒーローって。

ヒーロー それだけ？

缶ゴ－ヒー 劇では、台本に書いてあれば、そういうことになるんです。

ヒーロー 素晴らしい。

缶ゴ－ヒー そういうことになるだけです。無理がなくなるわけじゃないですよ。

ヒーロー つまり無理があったと。俺の場合。

缶ゴ－ヒー 無理っていうか、だって、ヒーローですよ。

そりゃ、登場人物、ヒーローって書かれたら登場しますよ。でも、舞台上で変身とかって無理

あるに決まってるじゃないですか。演劇は特撮できないんですよ。

ヒーロー 変身しなければいいじゃないか。

缶ゴ－ヒー しないんですか？変身。最後まで？一度も？

ヒーロー このままじゃヒーローに見えない？

缶ゴ－ヒー …見えませぬね。

ヒーロー それは…先入観だ。

缶ゴ－ヒー ヒーローをヒーローに見せるのはだいたい先入観です。

ヒーロー …そんなことは…

缶ゴ－ヒー 問答無用で「ヒーロー」というからには誰が見てもわかるヒーローらしさが

いると思うんです。

ヒーロー だから変身するの？

缶ゴ－ヒー わかりやすいじゃないですか。

ヒーロー でも、「ヒーロー」って書いてあるんだろ？俺がなにか言うたびに。

ならそれでいいじゃないか。わかりやすい。

缶ゴ－ヒー 台本には書いてあります。でも、俳優は台本読みますけど、

登場人物は台本読まないじゃないですか。…読まないですよね？

ヒーロー 読まない。見たこともない。

缶ゴ－ヒー ね。

ヒーロー あれ？ちょっと待って。じゃあさ、俺がヒーローだってことは、誰が知ってるわけ？

缶ゴ－ヒー だから、さっきも云いましたけど、登場人物の皆さんにはわからないんです。

あなただって知らなかったでしょ？もちろん、観客も誰も知りません。

ヒーロー じゃあ、「登場人物の名前」は、誰のために書いてあるわけ？

缶ゴ－ヒー …俳優ですかね？

ヒーロー じゃあ…俺がヒーローだってことを知ってるのは…

缶ゴ－ヒー 俳優だけでしょうね。

ヒーロー (混乱している)

缶ゴ－ヒー なにか？

ヒーロー 劇の中のことを、どうして劇の中にいる俺達が知らなくて、

劇の外にいる君たちが知ってるわけ？なんのために？

缶ゴ－ヒー 劇ってそういうものなんですよ。

ヒーロー どうして？

缶ゴ－ヒー そんなのひとことでは説明できません。

劇の中にいるとわからないけど、劇の外にいれば簡単にわかることって、けっこういろいろ

あるんです。

ヒーロー？いろいろって何？

缶ゴ－ヒー …いろいろ…うーんと、ん、…タイトルとか。

ヒーロー タイトル？

缶ゴ－ヒー えっと、劇のタイトル…というのは、つまり、あなたが登場するはずだった、世界の名前です。

ヒーロー せかいのなまええ？

缶ゴ－ヒー あなたは登場人物だったから考えたこともないと思いますが、

あなたが登場する…はずだった、世界には、名前がついてるんです。

ヒーロー …なんのために???

缶ゴ－ヒー …呼ぶためです。名前って大事ですよ。

名前をつけることで、初めて、他のものと区別されて、独立した存在として、認められるんです。

ヒーロー それはわかるけど…でも…思いつかないだろ世界に名前をつけるなんて。

缶ゴ－ヒー タイトルは大切です。観客がいちばん最初に劇に出会うのは劇のタイトルなんですか

ら。

ヒーロー 世界の名前にどんなタイトルがふさわしいかってどうやって決めるの？

缶ゴ－ヒー そこが作者の腕の見せ所です。

ヒーロー 劇の内容を的確に表す、わかりやすく覚えてやすいことばを劇のタイトルに選ぶんです。

ヒーロー 世界を的確に表す、わかりやすく覚えてやすい言葉…ね…。
なんかぴんとこないんだよね。というか抵抗がある。それは、俺が劇をつくったことがないからかな。そして、最初は登場人物だったから…ん？ちょっと待って。

缶ゴ－ヒー なんですか？

ヒーロー あれ？他のと区別するため…に名前をつける？世界の名前？タイトル…？
てことは、世界がほかにもあるってこと？えー?!それは変だろう。

缶ゴ－ヒー ほら。それが登場人物的発想なんです。

ヒーロー ????

缶ゴ－ヒー 世界はひとつしかないと思ってる。

ヒーロー 世界は、ひとつだろう。

缶ゴ－ヒー それは、あなたが登場人物だから。

ヒーロー ?
缶ゴ－ヒー 劇を見てるひとにはひとつ

じゃない。

かけがえのないたったひとつの世界が、劇の数だけあるんです。劇の数だけ、主人公がいるんですよ。

ヒーロー ……

缶ゴ－ヒー タイトルも登場人物の名前も、劇を見ているひとのために必要なんです。

登場人物のみなさんには関係ないんです。(ふと天井を見てあわてる)

缶ゴ－ヒー を持つ男、吊り忘れていた灯体を吊るために脚立に上る。

ヒーロー に見えない男は考え込んでいる

缶ゴ－ヒー だけど、こうなってみれば、むしろ、「ヒーロー」でよかったのかもしれないよ。

ヒーロー え？

缶ゴ－ヒー 知りたいんでしょ？

ヒーロー ……

缶ゴ－ヒー どんな登場人物だったのか。

ヒーロー ……

缶ゴ－ヒー 僕が知りたいと思ったように。

ヒーロー ……

缶ゴ－ヒー 観客が、どんな登場人物が何をどんなふうにするのかを知りたくて劇を見るように。

ヒーロー…

缶ゴ—ヒー 「田中弘」とかって役名だったら手掛りなさすぎて手の施しようがなかったですよ。

ヒーロー……どんな田中弘なんだっ!?!?なんの田中弘なんだっ!?!?誰のための田中弘なんだ?!
って悩むこともなかったと思うけど。

缶ゴ—ヒー ……

缶ゴ—ヒーを持つ男、黙々と作業を続けてる。

ヒーロー (しかし諦めない) で、どんなヒーローだったの?俺。

缶ゴ—ヒー (呆れて) だから、そういうことがわかるほどあなたの台詞は書かれてなかったんです。

ヒーロー ……

缶ゴ—ヒー いろいろ想像はしました。

この台詞はどんな場面で、誰に何を伝えるための台詞なんだろう?ここからどんな風になつて、どんな風に誰と闘って…

ヒーロー 俺、闘うの?

缶ゴ—ヒー 闘うでしょう。ヒーローですよ。

ヒーロー うん。でも闘わない…:気がする。なんか、抵抗がある。

缶ゴ—ヒー そうなんですか?

ヒーロー ……うん。

缶ゴ—ヒー 闘えないんですか?

ヒーロー いや、闘えるんだと思うよ。闘わないんだから。

缶ゴ—ヒー そんなヒーローがいますか?

ヒーロー だって…。闘ってる場面があった?

缶ゴ—ヒー ……ないですけど。

ヒーロー ほら。

缶ゴ—ヒー それは、書かれてあった部分にないだけで、きっと…:…。

うーん。いや、でも、本人が言ってるんだからそうなんですかね。聞いてみないとわからないことってありますからね。

ヒーロー 聞いて聞いて。本人だから。

缶ゴ—ヒー 誰を救うはずだったんですか?

ヒーロー え?…:救うの?

缶ゴ—ヒー 救うでしょう。ヒーローですよ。

ヒーロー いや…:それは…:うーん。わからないけどでもそれには抵抗がない。…:から、救うのかな。誰を?

缶ゴ—ヒー 「たったひとりでもいい。そのひとは誰でもいい。

彼が救わなければ誰にも救われることのない誰か救えろとしたら、それは立派なヒーローの仕事だ。」(派手なアクションで見得を切る)

ヒーロー ……?

缶ゴ—ヒー って台詞がありましたよね。

ヒーロー 俺の台詞?

缶ゴ—ヒー そうです。

ヒーロー あれ…:自分のことだったのか。誰に説明してたんだろ。

缶ゴ—ヒー 誰にもなく。つまり、みんなに。

ヒーロー ん???

缶ゴ—ヒー どこまで把握してるんですか?自分の劇のこと。

ヒーロー 自分の言うはずだった台詞は知ってると思う。

缶ーヒー 他の登場人物のことは？
ヒーロー うーん。

缶ーヒー 自分が言われた台詞も？

ヒーロー いや、それは…、結局云われなかったわけだし。

缶ーヒー そうか。

ヒーロー 完成してないってことは、上演されてないわけだから、その劇の中では実は何も起こってないわけで、誰かに何か言われたとか、誰かに会ったとか、なにもかも未経験なんだよ。

缶ーヒー なるほど。

ヒーロー どういう意味だろ？

缶ーヒー 何がですか？

缶ーヒー 「たったひとりでもいい。そのひとは誰でもいい。

彼が救わなければ誰にも救われることのなかった誰かを救えるとしたら、それは立派なヒーローの仕事だ。」(自分自身に言い聞かせるように)

缶ーヒー …そういうふう言うんだ…

ヒーロー 何？

缶ーヒー や…、そのまんまの意味じゃないですか？

ヒーロー 俺、たったひとりの誰かを救うはずだったの？

缶ーヒー …

ヒーロー たったひとりしか救わなかったの？

間

缶ーヒー …ヒーローの役って聞いた時、僕、ちょっとわくわくしました。

ヒーロー そうなの？いや、そうだよな。

缶ーヒー ヒーローって、説明もなく最初からヒーローって言われたらたしかにちょっと引きますけど、引きましたけど、でも、やっぱり、なんか、ちょっとかっこいいなーと思って。

ヒーロー それはそうだろ。ヒーローなんだから。

缶ーヒー 「みんな誰かのヒーローだ！」とかいうのって、嫌なんですよね。

ヒーロー そう？なかなかうまいこというなって思うけど。

缶ーヒー 思いません。

ヒーロー そう…。

缶ーヒー …ヒーローは特別だからヒーローなんです。

ヒーロー …気持わかるけど、大勢いたほうが、大勢救われたい？

缶ーヒー (いいえ。)

ヒーロー いや…だって…じゃあ…ヒーローって一人だけ？で、そのひとりが俺？

俺ひとりにできることって小さいよ。

缶ーヒー 小さくしないでください。

ヒーロー わざわざ小さくはしないけど、でも自ずと限界が…。たったひとりでもってさっき…

缶ーヒー ひどりで救えるならヒーローですよ。僕もそう思いますよ。

ヒーロー それは…

缶ーヒー ヒーローは、特別だからヒーローなんです。

ヒーロー …はい。

缶ーヒー 特別じゃないヒーローなんて、ヒーローじゃありません。

ヒーロー それは言いすぎなんじゃ…

缶ーヒー いいえ。ここ、大切です。

ヒーロー …はい。

間

ヒーロー：飲んだら？（置かれたままの缶コーヒーに目を遣って）
缶コーヒー え？

ヒーロー あれだけしゃべったら喉乾くでしょ。

缶コーヒー いや。僕は特に…。

ヒーロー さすが俳優。

缶コーヒー 別に、俳優だからじゃないと思いますよ。

ヒーロー そう？

缶コーヒー のど渴いてるのはお互い様じゃないですか？よかったら、どうぞ。

缶コーヒーを持つ男、缶コーヒーを取りに行く。二本手に取り、ヒーローに見えない男に一本差し出す。

ヒーロー（差し出された缶をじっと見ている）

缶コーヒー 何か？

ヒーロー コーヒーは漢字で書けるのに、ヒーローって書けないよね。

缶コーヒー ???

ヒーロー 書けそうなんだけど、書けないよね。

缶コーヒー …

ヒーローに見えない男はコーヒーを受け取らない。

仕方がないので、缶コーヒーを持つ男はずっと両手に一本ずつ持っている。

だから飲めない。

ヒーロー ねえ。俺が登場しないのは、どんな劇？（まだ訊く）

缶コーヒー どんなんて…えっと、

ヒーロー 削除されたのは俺だけ？

缶コーヒー まあ。

ヒーロー じゃ、他のみなさんはそのままその劇に？

缶コーヒー はい。

ヒーロー ふうん。

缶コーヒー タイトルもそのまままで。

ヒーロー 世界の名前ね。

缶コーヒー …

ヒーロー で、どんな話？

缶コーヒー 小さな劇場の話です。週末に子供向けのヒーローショーをやってる…。

ヒーロー ヒーローショー！！

缶コーヒー あ。でも、ヒーローショーのシーンにはありません。

ヒーロー そうか。俺はそこに出るはずだったのか。

ヒーロー ショーのシーンがなくなったから削除されたのか…。

缶コーヒー 違います。

ヒーロー …。

缶コーヒー ここみたいになちゃんとした建物じゃなくて、

屋根と床に安っぽいパネルがはってある貧弱なプレハブ小屋なんですけど、その劇場のこだわりは、毎回違う劇を上演してできるだけたくさんヒーローを登場させることと、劇が上演されている間、客席を完全に真っ暗にすることなんです。

ヒーロー 劇が上演されている間、真っ暗になるってこと？

缶コーヒー 舞台の上は明るいですよ。もちろん。暗くするのは客席だけです。

ヒーロー 客席？

缶コーヒー (客席を指さす)

ヒーロー (客席の方向を見ている)

缶コーヒーを持つ男、不審そうな顔をする、が…

缶コーヒー (あ！…) 劇を…見たことがないんですね。

ヒーロー ない。

間

缶コーヒー 劇場には、舞台と、客席があります。

ヒーロー …

缶コーヒー この劇場でいうと、僕たちが今立っているところが舞台です。

ヒーロー …

缶コーヒー ここから向こうが客席です。

ヒーロー …

缶コーヒー 開場されたら、観客はその扉からはいつてきて、あっち側に座るんです。

ヒーロー (ここは迅速に突っ込む) 登場人物は？

缶コーヒー 登場人物は客席には座りません。

ヒーロー 舞台の上にいるか、舞台にいないときはどこか遠くにいます。

ヒーロー ふうん。

缶コーヒーを持つ男、にわかに声を張り上げて…

缶コーヒー 「劇が上演されている間、客席の明りは消され、劇場のすべての灯は

登場人物の生きる世界だけを照らします。その場所をかけがえのない世界として生きる登場人物に敬意を表して。消えていた灯がもう一度灯ったとき、その世界はもうどこにもない。

そこ以外のどこにもないはずの登場人物も、そこにはもういない。そこでしか起こらなかったはずのことも、そこではもう起こらない。だからこそ、観客は、そのかけがえのない世界の成り行きを、息をのんで見守ります。」

ヒーロー…それも劇の台詞？

缶コーヒー はい。「だから、客席は、できるかぎり、真っ暗でなければなりません。」

ヒーロー ふうん。あれ？でも、さっき世界は劇の数だけあるんだって言わなかった？

缶コーヒー よく覚えてますね。

ヒーロー 俺にとっては衝撃的な内容だったから。

缶コーヒー そうでしょうね。

ヒーロー どっちなんだ？

缶コーヒー 「かけがえのないひとつ」なのか「たくさんの中のひとつにすぎない」のか、

缶コーヒー どっちもです。

「もし、劇の中の世界が劇の外から見てもたったひとつのかけがえのない世界だったら、劇の中で起こらなかったことはどこの誰にも起こらないことになってしまう。それでは観客は安心して劇を楽しめません。そこで起こらなかったことは別のどこかで起こることかもしれない。誰かに起こったことは自分には起こらないことかもしれない。世界はこうだったかも

しれないし、ああだったかもしれない、あるいはもっと別の何かかもしれない。」
ヒーロー……

缶ゴ―ヒー 「灯が消えるのがその一度だけじゃないことを観客は知っています。」

ヒーローに夢中になっている子供だって、劇が終われば劇場を出て行くし、また別の劇を見るために劇場へ来るんです。たったひとつの、かけがえのない世界が、劇の数だけあるのが、劇場なんです。」

間

ヒーロー……なるほど。

缶ゴ―ヒー さすが飲み込みが早いですね。

台本を読んだとき、僕は最初、意味がさっぱりわかりませんでした。

ヒーロー 意味のさっぱりわからない言葉をよく覚えられるね。

缶ゴ―ヒー 俳優なんで。

ヒーロー それにしてもさ……

缶ゴ―ヒー 僕の、台詞なんです。

ヒーロー え？

缶ゴ―ヒー 新しい台本では、僕の役はヒーローじゃなくてヒーローショーの監督なんです。

ヒーローに見えない男、あまりのショックに呆然としている。

缶ゴ―ヒー 俳優にとって、役は劇の数だけあるんです。

ヒーロー……

缶ゴ―ヒー 今僕は、あなたの役を演じる俳優じゃありません。

ヒーロー……

缶ゴ―ヒー あなたの目で見ていた世界を、今は別のひとの目で見ています。

ヒーロー……

缶ゴ―ヒー ヒーローに比べたらぜんぜん……。無理矢理作ったような役なんですけどね。

……無理矢理作ったんでしょうね。

ヒーロー……

缶ゴ―ヒー 黙っててすみません。

ヒーロー なんて……

缶ゴ―ヒー 言えなくて。

ヒーロー 言ってよ。

缶ゴ―ヒー 言えませんでした。

間

ヒーロー だから君はこの劇場にいるのか。

缶ゴ―ヒー あさってからの公演に出演するんです。今日は、ここでトラックが着くのを待ってま
す。

ヒーロー 要するに。削除されたのは俺だけってことか。

間

缶コーヒー それは…どうでしょう。
ヒーロー いいよ。
缶コーヒー いえ。そうじゃなくて。
ヒーロー 何？

缶コーヒーを持つ男、しばらく考え込んでいる。やがて。

缶コーヒー この劇には、俳優も観客も知らないけど登場人物は全員知っている人物が一人います。その人物は劇に登場しません。

ヒーロー？

缶コーヒー この劇は、その人物に出会えなかったひとたちの物語なんです。

ヒーロー？

缶コーヒー 劇の中に登場しない人物は台本にも上演パンフレットにも記録されませんから、劇の外にいる僕たちには知る方法がありません。だけど、この物語は、その登場人物が劇に登場しないことで成り立っている。「誰もその姿を見ていない」ということの上に成り立っている。

ヒーロー それが、ヒーロー？

缶コーヒー 改訂されたほうの台本にはヒーローという登場人物はいません。

劇に登場しませんから、誰も彼をヒーローと呼ばない。闘わないし変身もしない。

ヒーロー それが…俺？

缶コーヒー わかりません。新しいほうの台本にはあなたの役は書かれていないし、

前の台本にあったあなたの台詞は削除されたり書き換えられたり別のひとの台詞になったりしています。新しい台本の中にあなたという登場人物は登場しないんです。

だけど…、あなたと話していると、なんていうか…

ヒーロー …なに？

缶コーヒー いえ。ん…

ヒーロー ヒーローに見えてくる？

缶コーヒー 見えませんね。

闘わない変身もしないそれどころか登場もしない。いたのかどうかもわからない。そんなヒーローがいますか？

ヒーロー だからいないんだろ？

缶コーヒー そうです。いないんですよ！

ヒーロー…

缶コーヒー 俳優は、台詞のない、劇の中に登場しない人物を演じることができません。

ヒーロー…

缶コーヒー だから、僕はヒーローの役をはずされたんです。

ヒーロー…

缶コーヒー だけど…（何か考えこんでいる）

長い間

ヒーロー あの…き。つまり、結局、どんな話に書き直されたの？

缶コーヒー 知りたいですか？

ヒーロー 知りたい。教えて。

間

缶ゴーパー 事故が、起きたんです。大きな事故でした。

真っ暗な中、動くことも、声を出すこともできずに助けを待つひとたちがいました。どこに誰がいるのかわからない。

物音もしない。何も見えない。

薄れていく意識の中で、声を聞きました。

たくさんの誰かが、たくさんの誰かの声を聞きました。

けれど、たくさんあった声は次第に途切れていき、最後にはひとつだけになりました。その声は途切れませんでした。他の声が聞こえなくなっても、荒唐無稽な物語を延々といつまでも語り続けました。

最後まで声を出すのできるひとがひとりだけいたんでしょう。

それが誰なのか誰にも分らなかったし、誰に向かって話してるのかも、何のために話しているのかもわかりませんでした。

ヒーロー (思わず口をついて出てくる) 「真っ暗で何も見えないと思っていただけけど、

記憶の中のその光景にはうっすらと白い灯りが差している。

雲の切れ間から、月の光が落ちてくる。

誰かの声が聞こえた。

誰もそれにこたえなかった。

答えなくても、声が聞こえた。

誰かの話すことばを、別の誰かが聞いていた。

誰かが話し続けていけば、闇は動いていた。話すことはいくらでもあった。話すために話し続けた。いるかもしれない誰かをいるかもしれないと思うために。

いるかもしれない自分をいるかもしれないと思うために。あったらいいのにとするものをあつたのかもしれないと思うために」

缶ゴーパー 長い時間のあと、彼らは救出されました。

救出されたのは、話をきいていたほうのひとたちです。話していた男は助かったひとたちの中にはいませんでした。救助を待つ人たちが命をつなぐために創りだした幻聴だという人もいました。そうかもしれないでも、みんなが聞いていた話が一致していたんです。満月の夜にふらりと現れたヒーローの話です。

ヒーロー 「満月だったんですね。今夜。だからこんなに明るいですね」。

缶ゴーパー 彼が助けなければ誰も助けることのできなかった、どこかの誰かを助けた、世界にたったひとりの、ヒーローの話です。

間

缶ゴーパー その男が最期にいったいなんのためにそんな物語を語り続けたのか…

もし彼が、声を出すのをやめていたら、何も聞こえてこなかったら、あの闇の中でみんな意識を保ち続けることができただろうか。でも、そんなことが、彼にわかっただろうか？彼らには男の声が聞こえただけけれど、男には誰の声も聞こえなかったんです。話してるのはその男だけだったんですから。

間

缶ゴーパー あの台詞、新しいほうの台本では少しだけ変わっています。そして、ヒーローではなく別の人の台詞になっています。

ヒーロー …

缶コーヒー 「彼が救わなければ誰にも救われることのなかった誰かを救えるとしたら、それは立派なヒーローの仕事だ」

ヒーロー 「たったひとりでもいい。そのひとは誰でもいい」

缶コーヒー 「もちろん、彼自身でも」

缶コーヒーを持つ男、調光卓をいじって、新しい灯りをつける。

舞台の上のヒーローに見えない男のいる位置に照明が当たる。

舞台の上？いや、そこは夜の海。雨が激しく降っている。

ヒーローに見えない男は語り始める。

缶コーヒーを持つ男は暗闇の中からその光景を見ている。

ヒーロー 真っ暗で何も見えないと思っていただけけど、

記憶の中のその光景には、うっすらと白い灯りが射している。

雲の切れ間から、月の光が落ちてくる。

缶コーヒー こんな満月の夜でした。いいえ。ほんとうは月のない夜でした。

ヒーロー 誰かの声が聞こえた。誰もそれにこたえなかった。

缶コーヒー 誰かの話す言葉を、別の誰かが聞いていました。

ヒーロー 闇の中に埋もれてしまいうるになると、声が聞こえた。

誰かが話し続けていけば、闇は動いていた：

缶コーヒー 伝えたかったからというより、残したかったからというより、

ただ、話すことができるから話していたのだと思います。人間は、言葉が話すことができるからです。誰がいるのかわからなくても、いるのかどうかもわからなくても、人間は、言葉が話すことができるからです。やがて、声はひとつふたつと消えていき、何も聞こえなくなりました。そんな中、誰かが静かに話し始めました。

二人 「満月だったんですね。今夜。だからこんなに明るいですね」

間

ヒーロー 話すのなら、今ここにないものか話を話したかった。

今ここにないものか話ばかりしようと思った。

缶コーヒー 物語は、途切れることなく明け方まで続きました。

ですから、記憶の中のその光景には大きな月が出ています。

誰もが月を見ていました。

真っ暗な闇の中、大きな月を見ていました。

それは、満月の夜でした。

こんな、満月の夜でした。

缶コーヒーを持つ男は頭の上の月を見ている。

ヒーローに見えない男もそれを見ている。

ふたり、月を見ている。

その月はきつと大きくなってきつと丸い。

ヒーローに見えない男、缶コーヒーを持つ男の持つ缶コーヒーを受け取って持つ。
缶コーヒーを持つ男は何も言わない。

ヒーローに見えない男、缶を手にとって月明かりにかざしてみる。
缶は鈍く光る…はずだ。そんなに大きな月の光はきつととても明るいからだ。
缶を上下に何度も振る。中の液体がちやふちやふと音を立てる。

落雷。

ヒーローに見えない男は缶を持って舞台を降りていく。
劇場の扉を開けて外へ出る。

しばらく。

劇場の扉の外でがやがやと人の声がする。声は近づいてくる。
缶コーヒーを持つ男、我にかえって扉のほうを見る。
劇場の明りがつく。扉が音をたてて開かれる。

今からここに、新しい劇の世界をつくるのだ。

第二幕……客席編

登場人物

椅子に座る女（女）

椅子を並べる男（男）

劇場の客席。扉は開いたまま。舞台には緞帳が降りている。

男が客席の椅子を丁寧にならべている。

他に人影はない。

並べ終わると最前列の席すべてにチラシを置き、やがて男は席に座る。

（最前列の通路側の席）

しばらく。

劇場の入り口から、トランクを持った女が入ってくる。

男、あわてて舞台の袖に駆け込む。何やら操作している様子。

女、男に気づかず最前列の、通路から二番目の席に座る。

男は客席に戻ってくるが、座りそびれて通路に立ったまま……

スピーカーからアナウンスが聞こえてくる。男の声である。

アナウンス

今日は、お忙しい中、遠方よりお越し頂きましてまことにありがとうございます。

もう、まもなく開演いたしますので、いましばらくお待ち下さい。

開演に先立ちまして、いくつかお願いがございます。

携帯電話など、音の鳴るものをお持ちのお客様。音が鳴らないように、設定してください。

また、上演中はお電話の着信だけでなく、お客様の方からの発信もご遠慮ください。

上演中に席を立ち舞台上がられることや、他のお客様と談笑されることもご遠慮下さい。

途中で気分が悪くなられたり、外に出たくなられたお客様は、入ってこられたのと同じ扉か

ら静かに退出してください。扉は閉めますが鍵はかけません。

お客様の姿は、劇の登場人物には見えておりません。

上演中は、彼らに話し掛けたりせず、驚かせないよう静かに見守ってください。

何かしたくなっても、何もしないで下さい。

上演時間は一時間です。ごゆっくりお楽しみ下さい。

しばらく。

男

……はじまりませんね。（座っている女に話しかける）

女

！（驚いて男の顔をまじまじと見る）

お客さん……少ないですね。

女

（客席を見渡して、不安になる）わたしたち、だけ……ですか？

男、笑みを浮かべて女の方を見ている。

今日は、ひとりで、もういちど見たくなって。

ひとりで、もういちど、みたくなって…。

前に上演された劇が同じ場所でまた上演されるなんてことあるんですね。めずらしいことではありません。再演といます。

再演。

ただし、なにもかも同じでなければならぬというわけではありません。

それは、時間が経てば、いろいろ状況も変わるでしょうから、何もかも同じというわけにはいかないでしょうけど。

もちろんです。同じことをしても意味が無い。

え？

あのときは違うんです。

あのときとは違う劇なんですか？

そのための、再演です。

えーっ！？（憤慨している）

？

再演って言われたら、前と同じ劇が見られると思いませんか？

いや、再演って言われたら前のは違う劇が見られると思うでしょう。

私は、あのときと同じのを見たいです。

どうして！？

同じのを見るために見に来たからです。

全く同じのもう一度見てどうするんですか。

あなた、劇を見たらいつもどうにかするんですか？

いや、…

違うのを見たいなら違うのを見に行きます。わざわざ同じのを見に来て違う劇を見てしまった

何をしたくて何をしたんだか何をしなかったんだかわからないじゃないですか。

でも、それではなんのためにもう一度上演するのかわからないじゃないですか

同じ劇をもういちど見るためじゃないんですか？

何もかも全く同じでないといけませんか？

ね？

なんのために？

前はできなかつたけど今ならできるとあってあるでしょう。

せっかくもういちど機会を得たなら前とは違う、新しいものを創りたいと思うのは自然な気持ち

ちだと思えますよ。

せっかくもういちど機会を得たのに、前とは違うものを見たいと思うのは

不自然じゃありませんか？映画だったら、昔見た作品をもういちど見たいと思ったら全く同じ

ものをもういちど見ることができると、昔見た劇をもういちど見たいと思っても、昔見たま

まもう一度見られるかどうかは創る方のひとの自然な気持ち次第だなんて。理不尽です。

間

もしかして…、あなた劇を創る人ですか？

いえいえいえいえいえ…

よかった。

なぜ？

劇を創る人とは、あんまりお話したくないんです。

…なぜ…？

女 男 女 男 女 男 女 男 女 男 女 男 女 男 女 女
：私は劇を創りません。
：はい、
見たことも一回しかないんです。
：はい、
私、今から、人生で二回目の観劇をするんです。たぶん。
たぶん？
そういう、デリケートな時期なんです。
：はい。
自分のことがまだよくわからない時に、ひとの事情とか分かりたくないんです。
：えっと：
ほら、事件の加害者と被害者だって、裁判所でも警察でも直接接触しないように工夫されてる
じゃないですか。
：は？？
混ぜるな危険っていうでしょ。
言いません。
そう？
混ぜませんし。あんまり。
そう：

女、チラシを見ながら：

女 男 女 男 女 男 女 男 女 男 女 男 女 男 女 女
だから、前と同じ劇がいいんです。
えっと：その：
あなたは、劇をよく見るんですか？
あ：えと：
常連さんぽいですよね。
いや：え：
あなたがそう言うなら：、やっぱり前のは違う劇なんでしょうか。
あ：えと：
答えなくていいです。
あ：はい。
あなたに聞いても仕方ないことだし。それに、劇が始まればわかることですから。
：（慌てている）
え？
：（すごく慌てている）
まさか。
（目をそらす）
この劇：ほんとに始まらないんですか。始まらないっぽい感じがするだけじゃなくて、
始まらないんですか？

女、思わず立ち上がり、そのはずみに持っていたチラシの束ををばらまいてしま
う。

男 女 男
：（女の落としたチラシを拾い上げようとして自分の分と混ぜてしまう）
混ぜないでください！
：すいません。

女、じっと男の目を見る。

男、逃げ場を失い、そのまま見つめ返している。

女 あなた……何か知ってますね。(詰め寄る)
男 ……
女 あなた、ただのお客じゃありませんね？
男 ……
女 そんな、劇を創る人でもない。
男 (うなづく)
女 じゃあ、誰なんです？
男 え…
女 劇場のひとつ？
男 (クビを横に振る)
女 あの、プロデューサーとか、そういう専門的な感じのあれですか？
男 (クビを横に振る)
女 でも劇の関係者？
男 ……(クビを縦に振る)
女 関係者。どういう関係なんです？
男 ……
女 この劇と、あなた。
男 ……
女 再演する劇が上演されないことと、客席にあなたとわたししかいないことと、
男 ……
女 あのチラシが前となんだか違うことと、あなたが劇の関係者なことは、関係あるんですか？
男 ……
女 あるんですね。

間

男 ……やり直したかったんです。
女 何を？
男 劇を。
女 だから再演するんですか？
男 再演はできません。あのときと同じ劇をもういちど上演しても意味がないんです。
女 ……？
男 あれではなくて、本来あるべき劇を上演しないと。
女 じゃあ本来あるべき劇を上演すればいいじゃないですか。
男 どうしてそういう劇が始まらないんですか？
女 それは…

男、たいへん困っているが、やがて腹をくくる

男 この劇には、完成された台本がないんです。
女 ……？
男 なんの話ですか？
女 台本が完成されないまま、上演されてしまったんです
男 そんなことできるんですか？

男 劇の作り方について、どのくらいご存じですか？
女 何も知りません。私は劇をつくりませんから。
男 劇を劇にするためには、たくさんの段階があるんです。
女 そうでしょうね。

男 まず、劇作家が劇の台本を書きます。

女 はい。
男 その前に登場人物や俳優が決まっている場合もあります。

女 はい。

男 その台本を演出家が読みます。
女 えんしゅつか：ってなんですか？
男 演出家というのは、台本に書かれていない部分を作る係のことです。

女 台本に書かれていない部分って何ですか？
男 台本に書いてあること以外のあらゆることです。

男 ？
女 舞台がどんな場所で、登場人物はどちらを向いて立っているのか、とか、そこから見えるものは何なのか、とか、そういうったことです。劇として成り立つために音を鳴らしたり灯りをつけたりすることもありますが、そういうあれこれについても、演出家が決めるんです。

女 ……
男 映画で言えば、監督のような仕事をするひとです。

女 ああ、
男 映画だと分かるんですね。

女 なんとなく、イメージですけど。で、演出家が読んでどうするんですか？
男 台本に書かれている物語を解釈して劇に仕立てます。

女 物語を、劇に。
男 物語を劇にするにあたって、何を重要だと考えるかは演出家によって違います。

女 この劇の演出家は、台本が完成されているかどうかということにはほとんど関心がなかったんです。物語がどんな結末を迎えるのかということに、関心がなかったんです。

男 ？
女 つまり、なぜ、どこから、どのようにしてこの物語がはじまらなければならなかったのか、

男 ということに全く興味がなかったんです。

女 はい。（質問のために挙手する）
男 はい。（質問を許可する）

女 でも、台本が途中で終わってたら劇が終わらなくないませんか。
男 その通りです。終わるはずがないんです。

女 終わらない劇を上演できますか？私が見た劇は、ちゃんと終わりましたよ。
男 だから、こうやってまた見に来ることができるんです。

女 それは…いいですか？復習します。
男 演出家というのは台本に書かれていない部分を作る係です。台本に書かれていないことをいかに魅力的に表現するか、で自分の仕事の質を問われます。

女 彼らは、台本に書かれていないことならなら、なんでもするんです。
男 台本に書かれていないことなら、なんでも？

女 台本が完結していなければ完結させるんです。
男 なんでもしますね。

女 はじまらない劇を始めることはできませんが終わらない劇を終わらせることはできるんです。
男 あなたえんしゅつかが嫌いなんですか？

女 演出家が特に嫌いなわけではありません。
男 ……（ほんとに？）

話を戻します。
はい。
完成されていない台本をもとに、その演出家は劇を完成させました。
……。
物語がどのように終わるかということは、とても大事なことです。
それは、おそらく、その物語の成り立ちに関わることなんです。
物語は最後に終わらせたように、最初に始まるんです。
……。
ですから、そこは、物語の作者が責任を持って決めるべき事だと思っ
……。作者は何をしてたんですか？
それは……
どうして完成させなかったんですか？
どうしてなのかはわかりません。
嫌になったの？
嫌になって放り出したのか、間に合わなかったのか、彼自身が途中で終わ
ってしまったのか……私には詳しい事情を知るすべがないのです。

女、何か考えている……が、話に割って入る

女 台本が完成しなかったのはえんしゅつかのせいじゃないですよね。
作者のひとがちゃんと終わらせないから、だから、えんしゅつかのひと
が仕方なく、代わりに終わらせたんですよ。興味があるとかないとかそ
ういう問題じゃない気がします
ですから、あの劇はあんなことになってしまったんです。
あんなこと？
私は納得できません。
??
あの終わり方に。
え……
私は絶対に、納得することができません。

女、何か考えている……が、話に割って入る

女 その、作者のひとが、理由はわからないけど、台本をちゃんと完成
させなかった。
はい。
でも、演出家さんが、それを無理矢理終わらせて劇にした。
はい。
あなたは、その劇の展開に納得がいかなかった。
はい。
それで……？今日ここで再演することになったわけですか……あれ？
ですからそれが……力及ばず……すみません。
？
あの劇を再演することはできないんです。

間

意味がわかりません。じゃ、このチラシは何なんです？このチケットは？
だましたんです。

私を？

はい。

あなたが？

はい。

なんのために???

やり直したかったんです。

再演するってこと？

ですから再演はできません。

ですからそれはなぜ？

できないんです。

それは、あなたが作者でも演出家でもないからですか？

…あ…え…

つまり、あなたは…

「…つまりあなたと私は出会ってはいけなかった…ということでしょうか。

こんな、地続きのところ、こんな線一本隔てただけのわずかな距離で、出会うなど？そういう約束事だから出会うなど？」

女は呆然と男を見ている。

女 私…あなたと以前どこかでお会いしていますか？

覚えておられますか？

どこで？（記憶をたどっている）

女は混乱している

女 あの。……………もしかして、あなたは……………

男は舞台裏から椅子を一脚持ってきて、

舞台中央の緞帳の前に客席を向けて置く

※舞台は緞帳の手前に少し張り出している

男 「最初に誰が何のためにここに椅子を置いたのかということ、

この椅子がもし、こんなふうにくっち向きに並べられていたら、

あなたは三日月ではなくオリオン座を見ていたでしょう。

もしかしたら、三日月を一度も見ることなくここを去ったかもしれない。

でもあなたは今、私の肩越しに三日月を見ている。

置いてある椅子には置いてあるように座るものです。

そして、そこから見えるものを見るんです。

そこからでは見えなかったものは見ないんです。」

それは、「三日月を背にする男」の台詞ですよね。

おお。よく覚えておられますね。

女 男 女の台詞のことはよく覚えてます。

女、混乱している

女 ということは、あなたは…

女 …はい。

女 …三日月を背にする男：役の俳優さん？

女 …どうして???

女 …だって。

女 …違います。(見るからに) 違うでしょう?

女 …え?じゃあ、だれなんです?作者でもない。演出家でもない。劇場のひとでもない。

女 …俳優さんでもない。でも劇の関係者…

間

男

「起こらない理由のあること以外はどんなことだって起こるんです。出会ってはいけないのならこんな無防備な環境を作るべきではなかったのです。」

女、考え込んでいる…

女

…見た感じも話し方も違いますけど、でも、なんだかあなた…
実は、そうなんです。

女

(半信半疑で言う) 「上演されなかった劇の登場人物が霊になって劇場を漂う」って聞いたことがありますけど…もしかして…そういう…あれですか?

女 …いえ、でも、あの劇はたしかに上演されましたよね。

男

あの劇はね。ああいう具合にね。本来あるべき形ではなく。でもたしかに上演はされました。

女

…ですから、漂ってるつもりはありません。私は私の意志でここにいるんです。

女 …なんのために?

女

…あなたに会うためにです。

女 …!?

間

男

あの時あの劇を見た人にもう一度会うためです。

女 …そのために、こんな手の込んだことを?

男

結果的にずいぶん手の込んだことを企てて、しかも失敗しているように見えるかもしれませんが、私は普通にやり直したかっただけなんです。

女

…? …ですからまず、作者を探しました。

女 …それがいいと思います。

男

…ですがみつきりませんでした。

女

…次に…

女

…えんしゅつかに相談したんですか?

男 なぜ？

男 だって…、物語を劇にするのはえんしゅつかなんでしょ？

男 作家はみつかからない。演出家は信用できない。そんな状況で劇をやりなおすにはどうすればいいか…

女 …

女 論理的に考えてみました。

男 …

男 誰の助けも無くひとりで問題を解決するためには、何よりもまず論理的でなければなりません。

女 ん。

女 はあ。

女 考えてみました。劇が劇になる過程について。

女 劇が劇になる過程？

女 まず、作者が台本を書きます。

女 そして演出家が劇にするんですね。

女 そうです。でも、それだけでは劇にならない。ここに、解決の糸口があると思いました。

男 …

女 劇が劇になるには最後の過程が必要です。

女 それはなんですか？

女 観客が劇を見る過程です。

男 …

女 劇を劇にする過程は、そこで、完了するんです。

女 最後に観客が受け取ったものがその劇の内容なんです。

女 その通りだと思います。

女 あなたは観客ですから、当然、そう言うでしょうね。

間

男

男 ということは。

女 ということは？

男

男 作者と演出家と俳優が何を言おうと何をしようとなんて何をしまいと、

女 観客がこういう劇だったといえればそれはもうそういう劇なのだという事です。

男 …

女 私は、作者ではなく演出家でもなく俳優でもなく、この劇の登場人物のひとりに過ぎません。

女 …ついに断定しましたね。

女 さっきのやりとりでこのあたりはもうクリアしているかと…

女 なんとなくそうなんだらうなとは思ってましたけど、

女 なんとなくではなく、そうなんです。

女 …聞かなかったことにおいたほうがいいですか？

女 いえ。できれば、無理のない形でじんわりと正体が明かせればいいなと思っていました。

女 かなり無理ありますけど…無理のない形で伝えられるような内容じゃないと思いますけど…

女 でも、無理すれば、納得できないことはないです。

女 ありがとうございます。では先に。実はここにあまり時間をかけられないのです。

男

女 え？

男、女の腕時計に目をやり…

男 すでに二〇分……
女 え？

男 続けます。

女 はい？

男 そこであなたにお願いがあります。
女 なんですか？

男 あなたの見た劇は、実はああいう風に終わらなかった、ということに
女 して頂けませんでしょうか。

男 はい？なんですか？

女 ですから、あなたの記憶の中にあるあの劇を、ああではなくて、本来あるべき劇に
修正して頂きたいのです。

男 なんのために？

女 やり直したいんです。

男 再演するってことですか？

女 わからないひとですね。再演はできないんです。

男 なぜ、できないんです？

女 ですから、私が作者でも演出家でもなく俳優でもなく登場人物のひとりに過ぎないからです。
男 あなたひとりで劇をもう一度上演するのは難しいでしょうね。というか無理ですね。

女 そうです。

男 それでも嫌です。

女 なぜ？

男 私が見た劇はそんな劇じゃないからです。

女 そんな劇じゃないことは知っています。だからお願いしているんです。

男 お願いされても嫌です。
女 なぜ？

女 だいたい、あなたに何の権利があってそんなこと……作者でもないのに。

男 著作権侵害です。断固反対します。

女 反対って……著作権って……そもそも作者がちゃんと仕事をしないのが悪いんです。

男 そんなことは私には関係ありません。上演する前に修正するのはありだと思いますけど、
女 もう上演してしまった劇をお客の記憶のなかで修正するなんて、そんな話、聞いたことがあり
ません。そんなのなしです。卑怯です。そんなのがありなんだったら、最初から上演しないで
お客に直接好きないように説明すればいいんです。
男 また極端なことを。

女 あなたが言ってるのはそういうことですよ。お客の受け取り方次第で劇の結末が変わるなん
て、
男 あり得ません。私は劇の一部じゃありません。私が劇を見て何を感じるかを誰かに決められた
女 くありません。

男 そんなに熱心に嫌がらなくても。私は当事者ですよ。本人ですよ。本人が言ってるんですよ。
女 本人だから何なんです。そもそも作り話でしょ？フィクションでしょ？虚構でしょ？

男 つまり、嘘でしょ？嘘の話の当事者ってなんですか？嘘の話の正解って何なんですか？
女 現実のひとつにとってはたかが虚構かもしれないませんが、
男 たかが虚構の私にとっては虚構の中で起きる事はすべて虚構的にほんとうのことなんです。
女 知りません。私。現実のひとつなんで。

男 私だってそう思っていました。
女 なんですか？

男 いえ……

男女 それに。私の記憶を訂正したって解決しませんよ
？

女 もういろんなひとに、話しちゃいましたから。
女 え?!
女 そんなに驚かないで下さい。
女 はあ
女 見てきた劇のことをひとに話す事ってふつうにあることじゃないですか。
女 何人くらいの人に、話したんです?
女 さあ。何人だったかしら?
女 誰に話したんです?
女 さあ。誰だったかしら?
女 それは:反則です
女 どうして?
女 だって、あなたから聞いた話は、あなたの主観が混じるでしょう。
女 私が見たものだって私の主観が混じってるんだから同じじゃないですか。
女 どんな風に話したんです?あの劇のことを。
女 そんなの、話す時によって違いますよ。
女 ?
女 話す相手によっても変わるし。
女 :だったら、修正してくれてもいいじゃないですか。
女 嫌です。私は、あの時見たあの劇を初めから終わりまでもう一度見たいんです。
女 ですから、それは、できないんです。

男、何をどうやってもうまくいかないので困っている。

女 (チラシを見ながら)「誰もいない森で、木が倒れた。そのとき、音はするのか…」
女 ?
女 2年前のチラシには書いてあったんです。
女 ?
女 今回のチラシにはありませんね。
女 はい。
女 なぜですか?
女 その問いには、「音はしない」と答えるのが正解だからです。
女 ?
女 これは、ジョンバーバークリーという哲学者による存在と認識についての議論です。
女 音というのは空気の振動が鼓膜に伝わって知覚されるもので、知覚する鼓膜、つまり聞くひと
女 が誰もいない状況では(音はしない)と考えるのが妥当だということです。
女 たしかそんなふうな台詞がありましたね。
女 そうです。あの劇の結末はその議論を下敷きにして作られましたから、
女 あの劇を見た人はみんな、なるほどそうかと思っただんじゃないでしょうか。
女 なるほど:そうですね。
女 そうでしょうか?!
女 ?
女 そうなんでしょうか?!

女、男の勢いに圧倒されている…

女 でも、でも哲学なんですよ?

女 男 女 男

哲学だったらなんなんですか？なぜ、自分の事情を哲学に説明されるんです？
あなたが登場人物だから…？
私はあの劇の登場人物であって、哲学の登場人物ではありません。
あなたの事情とその哲学は何か関係あるんですか？

間

音を。聞いたような気がするんです。

あなたが？

はい。

誰もいない森の奥で木が倒れた音を？

はい。

あなたそんなこと言ってなかったと思いますよ。

言いませんでした。そういう台詞がなかったからです。

ほら。

ひとは、言葉にしたことだけを考えてるわけではありません。特に劇の登場人物は。

木が倒れたとき、あなたは、森の中にいたんですか？誰もいない森に？

誰も居ない森の中に誰かいるわけないでしょう。

あの物語は、私が森を離れた後に始まっています。

じゃあ、森の外で聞いたんですか？森の奥で木が倒れた音を？

そうです。森の中には誰もいませんから。聞くのであれば森の外です。

そんな変です。

なぜ変なんです？誰も居ない森の奥の音は森の外の誰かには聞こえないんですか？

：

月が出ていました。

木が倒れたのは夜だったんですか？！

凍るような三日月の夜でした。森の中はうっすらと明るくて。

地面に落ちた木々の影がさらさらと揺れていました。

待って。あなたは森の外にいたんですよね。

そうです。

なぜ、森の中の様子を知ってるんです。

音が聞こえたからです。そんな森の奥で、そんな風に木が倒れる音が。

あなたが聞いた音が、その森から聞こえてきた音だっていう証拠があるんですか？

ありません。

じゃあ、あなたの思い込みかもしれないじゃないですか。

そうかもしれませんが、そうじゃないかもしれません。

：

とにかく私は、あの劇の結末には納得できないんです

どうして？

あの森がたしかにあそこに在ったことを知っているからです

間

誰もいない森には、誰がいないんでしょう。

…

誰かいるときは誰がいるのか気にするのに、誰もいない時は誰がいないのか誰も気にしない…

：

男 誰もいない森の奥で木が倒れた。物語はその森から始まっています。
女 誰も……

男 ですから、あの物語はああいう風に終わるはずがないんです。

女 でも、あなたの言ってることが正しいなら、その演出家は どうして、あなたが思ってるような
男 結末にしなかったんですか？

女 彼が語ろうとしたのはあの森ではないからです。

男 どうして？森を間違えたんですか？

女 ！（一瞬言葉につまるが……やがて笑い出す）

男 なんですか？

女 ……そうですね。わざと、間違えたのかもしれないですね。

男 ？

女 彼には、自分の知らない森のことを語る必要と理由と方法がわからなかったんです。

男 ？

女 どこにどんな風にあるのか、いえ、そもそもあるのかどうかもわからない森のことを、
男 手を尽くして誰かに伝えたいと思わなかったんです。

女 それは思わないでしょうね。

男 ですから彼は、彼がよく知っていて、彼自身が十分に魅力的だと思っている別の森について
女 伝えることにしたんです。

女 ……そんなことしていいんですか？

男 （無視して続ける）森が違うんですから、劇の結末も違います。

女 ……

男 あの劇にはあの結末がきつと正しい。

女 ……

男 知っている森のことですから自信を持って紹介できる。説得力も魅力もある。

女 ……だったら

男 観客も安心して劇を楽しむことができます。

女 ……

男 そういう劇を創ったんです。彼にはそういう劇を創る責任がありますから。

女 ……

男 実際、あの劇は、たくさんのお客に受け入れられた。

女 たしか……チケットもぜんぶ売り切れたって。

男 そう。とても評判がよかったです。

女 あなたは何が気に入らないんですか？

男 私は劇の登場人物です。

女 「三日月を背にする男」

男 そうです。私はたしかにあの森にいたんです。

女 ……

男 ですが、最後まで見届けることができなかった。

女 ……

男 森を離れたからです。私だけじゃない。一人残らず、そこを離れなければならなかった。

女 だから誰もいなくなったんですか？

男 だから納得したくない。

女 ……

男 あの森がどこにどんな風にあって、そこにはどんな木が植わっていて、どれくらい広がって、

女 森の奥はどれくらい暗くて、どれくらいの時間どんな風に月の光が差し込むのか。どこにある

男 どれくらいの高さの木がどんな風にどういう理由で倒れるのか……。彼は結局何も知らなかつ

女 た。知らないことを知るために語ろうとは思わなかった。

男 音がするのかわかるために彼自身が耳を澄ますことを思いつかなかった。

男女男女

：
語るべき森が選ばれて、語るべきことばで語られて、語るべき姿で観客に届けられた。
：
あの森は、その過程のどこにも入る余地が無かった。

しばらく。長い間。

男女女

あなたは。森の外とか中とかにいたから知らないでしょうけど。
？
チケットが売りきれくらい人気の公演だったのに、最後の日、一番前のこの（通路の横の）席は、劇の間、ずっと空いてたんです。

男女男女男

あの劇の間、ずっと空いてたんです。
誰が座ってなかったんです？
私は、あの日も、劇が始まる前からこの席に座ってました。

男女女

あの日はここに座っていたら劇が始まりました。劇が始まっても隣の席は空いたままでした。劇が終わっても空いたままでした。空いている席の隣に、私は劇が終わった後もしばらく座っていました。

：誰かと一緒に見るはずだったんですか？

（答えない）私は劇を見たことがなかったんです。

そういうひとは多いです。

あの日、初めて劇場へ行ったんです。

：

劇を創るひとは、劇を見ないひとを劇場に連れて行きたがるんです。

劇を創るひとと見に来たんですか？

（答えない）見ればきつとわかると思ってるんです。

何がわかるんです？

知りません。私は劇を創りませんし、見たのも一回だけですから。

：はあ。

行ってみることにしたんです。

劇場に？

劇場に行つて劇を見れば、劇を見ればわかることだと劇を創ってる人が思ってることが、

わかるかと思つて。

ん：（頭を整理している）

私に何を見せたいのか、わかるかなと思つて。

：

公演の半年前にチケットを一緒に買いました。チラシを、部屋に貼つて：

例の、出演者の名前が書いてあるタイプのやつですね。

（無視して）そして、あの日、劇場へ行ったんです。

あ……あれ？……あなたさっき、ひとりで……つて

ひとりで行きました。

半年あれば。けっこういろんなことが半年前とは全然違つてたりするんです。

：

あの劇だつて、半年前には劇じゃなかったでしょ？

どんなふうが始まつてどんな風に終わるのか、誰も知らなかったんでしょ？

おそらく。

作者のひとだつて知らなかったくらいですもんね。

女男 女男

女男 ……
その劇を見る理由も見せたい理由もなくなったけど、それで劇がなくなったりはしないんです。

男 ……それは…そうですね。

女 ……そういうわけで、私は見る理由のない劇を見たんです。

男 ……何かわかりましたか？

女 ……わかるわけじゃないですか。

男 ……

女 ……ないんですから。

男 ……

女 ……ほんとうはどうだったのかとかどうでもいいんです。誰が始めたとか誰が終わらせたとか

男 ……どうでもいいんです。どの森がほんとうの森とかどうでもいいんです。

女 ……

男 ……私は、あの劇と同じ劇を終わるまでもう一度見たいんです。

女 ……今日は、あの劇を見に来たんです。

男 ……なぜ？

女 ……なんだかもすごく複雑でものすごく大変そうですけど、

でも、私にはあなたの事情はわりとどうでもいいんです。

間

女 ……ごめんなさい。

男 ……いや…謝らないでください。私も同じ気持ちですから。

女 ……え？

男 ……だって、あなたの問題は…まあこういっては何ですが……所詮、劇の外の話じゃないですか。

女 ……！？

男 ……誰もいない森の奥で木が倒れた。

女 ……

男 ……客席にいたあなたにとっては劇の中の架空の森の話にすぎないんでしょうが。

女 ……

男 ……どんな場所にも当事者はいるんです。

女、ふと横を見ると、男が隣の席に座っている。

女 ……えー?!なんですか？

男、女にチケットを見せる。

男女 ……あなたの…? A-4番です。

しばらく。ふたり、座っている。

男女 今日、この席には誰が坐ってるのかなと思ってたんです。

女 ……? ?

男女 ……誰が座っても誰なのかわからないでしょうけど、誰が座ってるのかなと。

男 …誰でしょう。
女 三日月を背にする男：
男 わかってよかった。
女 ？
男 隣に誰が座るのか、わかったほうがいいと思います。

間

女 あれ…。ちょっと待って下さい。

あなたは劇の中では、こちらを向いて二人で向かい合わせに座ってましたよね。

男 はい。私が三日月を、彼女がオリオン座を背にしていました。

女 舞台の向こうに三日月、客席の後ろにオリオン座が出てたんですよね。

男 よく覚えてますね。

女 つまり、あなたが見ていたのはオリオン座、向かいの彼女が見ていたのは、三日月：

男 はい。

女 あなたがここに座ると三日月はこっちに（客席の後ろを指す）出ていますか？

男 今客席からはオリオン座が見えるんですか？…ここにすわってれば、私にもオリオン座が見

女 えますか？

男 見えません。

女 じゃあ、あなたがここに座るとあなたには何が見えるんですか？

男 ここからは三日月が見えます。オリオン座があっち（客席の後ろを指す）、三日月があっち（舞

女 台の奥を指す）です。
あなたにはもう、オリオン座は見えないんですか？

男、立ち上がりつて舞台上上がり、緞帳の前の椅子の後ろに客席を向いて立つ。

男 「最初に誰が何のためにここに椅子を置いたのかということですが、

置いてある椅子には置いてあるように座るものです。そして、そこから見えるものを見るんです。そこからでは見えなかったものは見ないんです。」

女 …？

男 （舞台に置いた椅子に座る。）…ここからはオリオン座が見えます。オリオン座があっち、三日月があっちです。

女 オリオン座は、客席からは見えないんですね。

男、女の顔をじっと見る。なにか考えている。

男 あなたがあの日、この劇場へ劇を見に来たのは、
女 会いたくなかったからです。

男 …？
女 ここにいるのがいちばん、会わずにすむと思ったから。

男 …

女 …そして実際そうだった。

男 …

女 …ここに座っていたら劇が始まった。だから劇を見てたんです。

男 …
女 …劇が終わる時間まで。

女 それだけではダメですか？

女 誰かが確かに聞いたというのを、「そんなはずはない」って否定するんですか？
聞かなかったひとたちが？

男、なにか考えている。しばらく。

男 聞こえたんですね。

女 きっと。

女 だからあの森はああやってあそこにあったし、私たちはあの森にいた…

女 どうして途中でやめてしまったんでしょうね。

女 途中でやめてしまったら、終わらせられないじゃないですか。終わらせないと終わらせよう
に始まらないじゃないですか。それじゃ、誰にもわからないままじゃないですか。

男 わからなくなったのかもかもしれません。

女 なにか？

男 そもそも、ほんとうに、自分はその音を聞いたんだっただのか。

女 …

男 聞いたのは彼ひとりなんです。空耳だったのかもしれないし、思い込みだったのかもしれない。

女 たしかめる方法が何もないんです。そんな根拠の不安定な森のことなんて…。

女 でも、それじゃ、その木のことは、誰も知らないままじゃないですか。

女 みんなが知ることができるのはみんなが知ってる森のことばかりじゃないですか。

男 …語るべき森が選ばれて、語るべきことばで語られて、語るべき姿で観客に届けられるんです。

女 …知るすべがないというわりには、いろいろよく知ってますよね。

男 想像してるだけです。自分しか知らないし、実は自分だって知ってるのかどうかよくわからない

女 ものの事をあなたは最後まで信じていることができますか？

女 …

女 たいへん残念ですが。そろそろ…

女 え？

女 劇の登場人物が観客の前にいるのは劇が上演されている間だけです。

女 …

男、緞帳の前から客席へ降りてくる。客席の椅子をひとつずつ、緞帳の前に積み上げて片づけ始める…一番前の列の椅子を着々と片づけていく。

女は立ち上がり、それを呆然と見ている…

男 この劇の上演時間は一時間です。

女 でも…始まってないんですよ。始まってない劇がどうして終わるんですか？

男 ここが劇場だからです。

女 劇場では、劇は始まる時間が来たら始まって、終わる時間が来たら終わるんです。

女 わたし、また騙されてるんですか？

男 (答えない)

女 またここへ来たら会えますか？

男 あなたは、もうここへはこないと思います。

女 どうして？私はもう少しあなたと話をしたいんですけど

男 今はそう思っても、きっと、劇場を出たら変わります。

女 そんなことないですよ。ちゃんと覚えてて、そして誰かに話したりしますよ。

ふたり、並んで、まだ片づけられていない二列目以降の客席を見ている。
彼らの目には誰も見えていない。

男

今日、このたくさんの空席には、誰が、座っていなかったんでしょうね。

(女の隣に腰かけようとする)

男のことはを遮るように突然暗くなる。

しばらく。

真っ暗な中。

木の倒れる音がする。凍るような三日月の夜に森の中で木が倒れる音が。

やがて。

舞台が明るくなる。

緞帳が開いている。

舞台の上には客席が、こちら向きにずっと奥まで並んでいる。

つまり、灯ったのは舞台上の客席の灯。

女が最前列の通路から二番目の席に座ってこちらを見ている。

しばらく座って前を見ているが、やがてトランクを持って立ち上がり、通路を
通って舞台奥へ去る。

扉の閉まる音がする。

……外へ。出て行ったのだ。

※台詞の中での「引用」部分はすべて、物語の中の架空の劇の台本からの引用であり、他作品からの引用はありません。

※劇の登場人物には観客の姿が見えていないという演劇の特性を利用し、上演にあたっては、上演会場である劇場の舞台と客席の最前列を舞台として使用しました。(客席編は舞台上の緞帳の前にスペースがあり、役者は客席、舞台上の緞帳前、舞台袖、緞帳の奥を行

き来します)